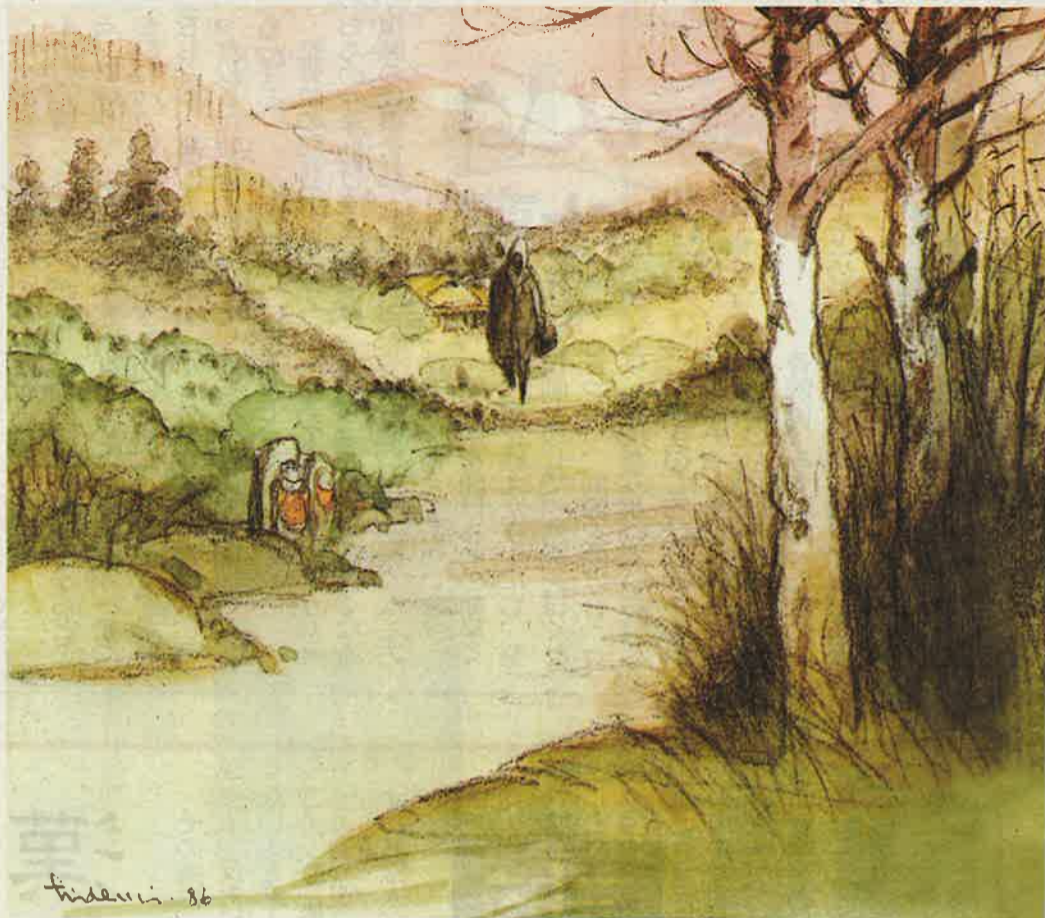


少年少女

やまがた人物風土記

14

志田周子 — 山村の女医



村の医者として生きる決意を

約東の3年までもう半年となった1938(昭和13)年冬。その日、志田周子は小学校で子どもたちの健康診断をしていた。そこへ6歳の弟がかけこんできた。

「周子おねえさん、周子おねえさん。お母さんがたおれた。早く来て！」

すべる雪道にあせりながら、家にかけてこんだとき、大出血をおこした母は、すでに息をひきとっていた。まだあたたかさののこっている母の手をなでながら、周子はくちびるをかんだ。「わたしは、なんのために医者の道を選んだのだろう。母の病気も見きわめられないなんて」

残された、6歳、4歳、2歳の弟たち。母をさがして泣く下の2歳の弟をせおつて外に出ると、夜空には、オリオン星がまたたいていた。弟をあやしながら、周子は決心していた。「幼い3人の弟の母がわりになつて、育てていこう。弟にとつて、わたししかいないのだ」そして「もつともつと医学を勉強し、二度と母

のようなことがないようにしたい」と。周子27歳のときのことである。

夜中の往診から帰ると、いつもいろいろの火を赤々と燃やして待っていてくれた父。治療がうまくいったとき、ともに喜んでくれた父。苦しみをわけあった父も、1950(昭和25)年2月、69歳でなくなった。周子は、こうした悲しみをじつとこらえ、村の人たちのためにまします、力をつくすようになった。

医療に燃えつきた星

「ふるさとのために、ふるさとに生きる」といっても、その道は険しく苦しいものだった。父が亡くなったとき、周子は39歳。村医・校医として、村の人たちの命を守り、また婦人会長や村議会議員として、村の生活の向上をめざし、家に帰れば、一家の中心としての責任と仕事が続いていた。

その中で、おなかをこわして死ぬ子ども、生まれて間もない赤ちゃんの死亡、働きすぎでなくなる若いお母さんなど、山村に多い病気が大井沢からは年毎に減っていった。家々をまわつての周子の熱心な指導が実をむすんだのである。

はじめは学校の先生になりたかったという周子は、子どもたちの教育にも力をつくしてくれた。へき地の教育をよくするために、医療と同じように情熱をかたむけたのだった。

「周子先生にばかり、なんぎさせては、ならない」と、村の人たちも力を合わせてくれた。「健康をすすめる会」を作ったのもその一つである。

1959(昭和34)年9月、全国保健文化賞の贈呈式が、東京第一生命ホールで行われ、志田周子女医が表彰された。質素な黒のスーツ姿の周子にカメラマンのフラッシュが続く。ハレルヤコーラスの大合唱で式は終わった。走りよる記者団に周子は短く答えた。「大変うれしいことです。でも父が生きていてくれたら、もつとうれしかったのに……」

それから3年後の7月、周子は51歳の一生を終えた。夜空のオリオン星を見上げて往診に急ぐことの多かった周子は、自分もオリオン星となつて、大井沢の空に召されていったのだった。

西山にオリオン星座かかると見つけ、患者(病人のいる家)に急ぐ雪路をふみて

周子のよんだ歌は、大井沢自然博物館の前の歌ひにきざまれている。亡き父の志をついで、村の人のためにつくした周子は、今も星とともに村の人々におおがれている。

(次は若き天才文学者、高山樗牛)

少年少女やまがた人物風土記

(1986~1990年に計5巻発行、各巻20人ずつ計100人を紹介)

■編者 山形県小中学校校長会、県小中学校教育研究会学校図書館部会
■編集・執筆 県内の学校教諭、教育関係の皆さん
■さし絵 小林秀美さん、鈴木慶夫さん(ともに白鷹町出身)
■発行 山形教育用品株式会社(山形市)
※本紙では、新聞表記の基準に合わせて表記を手直し、再編集している所があります。